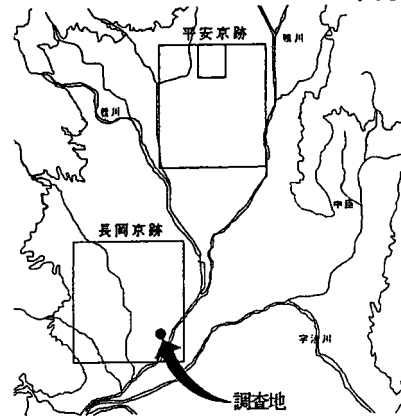


長岡京左京六条三坊跡（水垂F区） 古墳時代水田跡発掘調査現地説明会資料

1991.09.14

所在地 京都市伏見区淀水垂町・樋爪町
調査期間 1990.07.09～継続中
調査面積 G区15,550㎡ F-1区6,900㎡
調査主体 財団法人京都市埋蔵文化財研究所



1. はじめに

調査は、京都市清掃局の埋立処分地拡張工事に伴うもので、全体の広さは京都御所の約1.5倍の13haあります。調査は昨年7月に開始し、現在までに南部のG区の調査を終了してF区を調査中です。今回の報告はF-1区の水田遺構の調査について行ないません。

2. 調査の概要

長岡京期の遺構（前回の現地説明会で報告）

調査地は長岡京の東南部にあたり、これまで東二坊大路と六条大路とその交差点、交差点を斜めに横切る河川が見つかりました。河川には橋が架けられており、ほかに水量調節用のしがらみ状遺構や杭列が見つかりました。また、河川の東岸の路面下で小型の木棺墓や土師器の甕を埋納した掘り込み等が見つかりました。しかし、現在のまでのところ住居跡は見つかりません。現在でも湿潤な所なので、当ても住むのに適した所ではなかったのでしょうか。河川から、人面墨書土器、模型カマド、土馬、人形等の祭祀に使用された遺物が大量に出土しています。

古墳時代の遺構

長岡京期の遺構面の下層で、古墳時代の水田遺構と流路が見つかりました。ほぼ全体に洪水によって運ばれた砂でおおわれていました。水田遺構は桂川の右岸の後背湿地の中で、長岡丘陵の裾から南東方向に伸びた海拔高度8.5m～7.8mの緩やかな傾斜地に営まれています。水田は傾斜に沿った方向（北西→南東）に約30m間隔に太くて高いアゼを作り、その間をさらに同方向に3～4本の小さいアゼで分割し、最後に直角する方向にアゼを設け

けて水田を完成させているようです。ただ、今回報告するF-1区では直交方向にも大きなアゼが作られ、30m×40mの区画を設けて、その中を分割しています。水田の一つの大きさは約5～150㎡で、形は方形または長方形です。水田が比較的小さいのは、ゆるい傾斜地で少ない労力で水田に水をためるための工夫だと思われます。また、水口^{みなくち}と思われるアゼが途切れる個所も見つかっています。

水田面やアゼ上から子供のものと思われる小さなものを含めて多数の足跡が見つかっています。また、牛の足跡と思われる円形のものもあります。

流路には、水田の用排水路と考えられるものと洪水の時の水の流れと考えられるものがあります。洪水にともなう流路は比較的浅くて、砂礫で埋まっています。水田の用排水路はU字形の深くてしっかりしたもので、埋っている土も粘土系の土です。たとえば、G-3区の水路は幅4～5m、深さ0.7～1mを測り、溝内に流れに直交して水量を調節するための施設を設けています。

水田の年代は、水田からの出土遺物が少ないためにはっきりとしたことは言えませんが、水田を覆っている砂礫層や洪水による流路から6世紀後半の遺物が出土していること、そして水田の水路から庄内式^{しょうない}・布留式^{ふる}と呼ばれる古墳時代前期の土器が出土していますのでその間に使われていたものと思われます。

出土した遺物には、土師器^{はじき}の壺^{つぼ}・甕^{かめ}・高杯^{たかつき}・小型丸底壺^{こがたまるぞこつぼ}・器台^{きだい}、須恵器^{すえき}の杯^{つぎ}・蓋^{ふた}・甕^{かめ}・高杯、木製の容器^{すき}・ナスビ型の鋤^{くし}・櫛等があります。

3. まとめ

今回までの調査で22,000㎡におよぶ広い面積で古墳時代の水田遺構を調査することができました。その結果、次のようなことが分かりました。

1. 水田は海拔高度8.5～7.8mで、北西から南東に伸びるゆるい傾斜地に作られている。
2. 水田一つの大きさが5～150㎡と小さく、形は方形または長方形で、地形に沿って作られている。
3. 用排水路から直接水田に水を給排水した施設は見つからなかったが、水口の位置等から傾斜に沿って北東の水田から南西の水田へ順次給排水されたものと考えられます。
また、今回は集落跡は見つかりませんでした。近くの微高地上で発見できるかもしれません。調査は引き続き行ないますので、どうかご期待下さい。

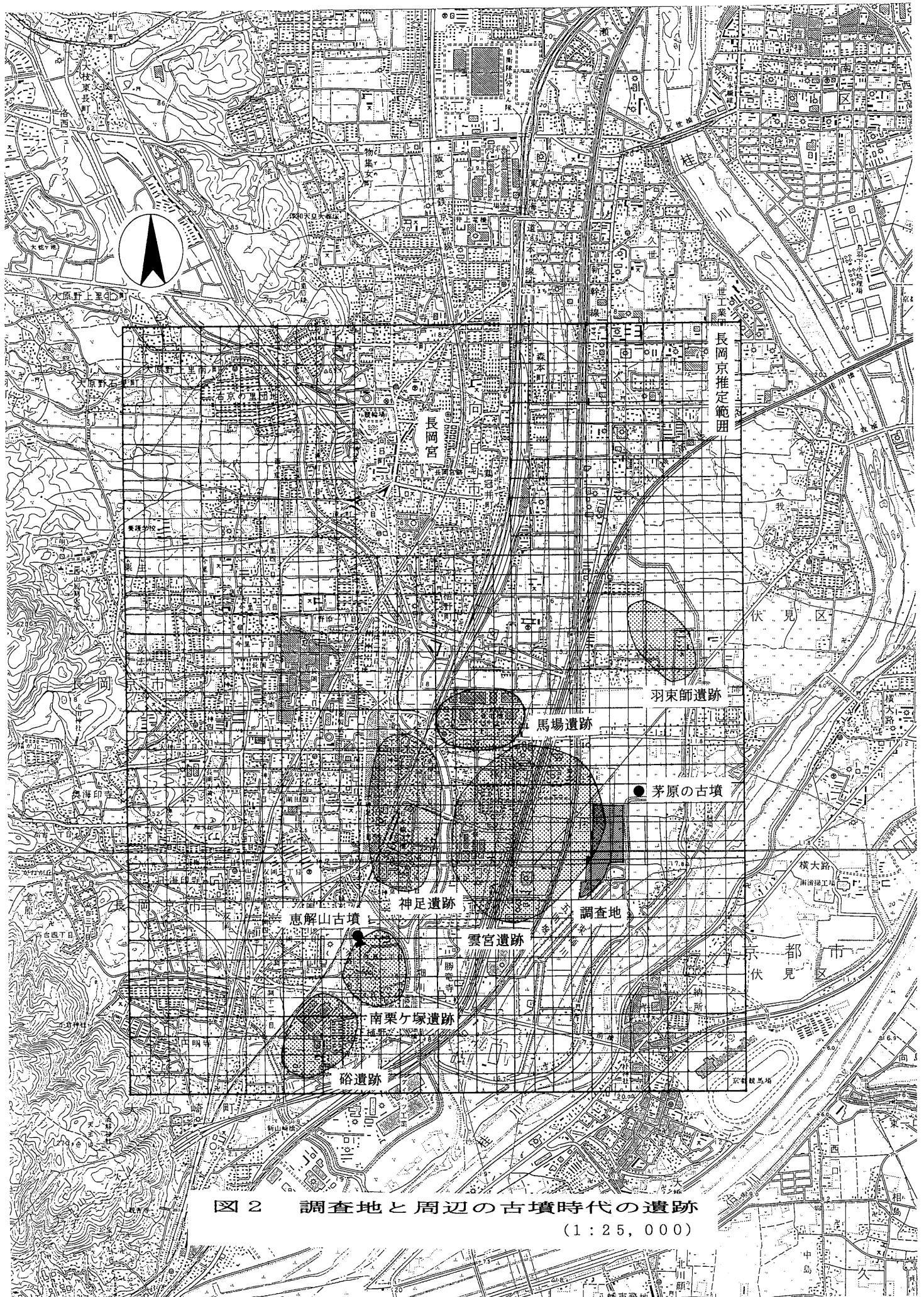


図2 調査地と周辺の古墳時代の遺跡
(1:25,000)

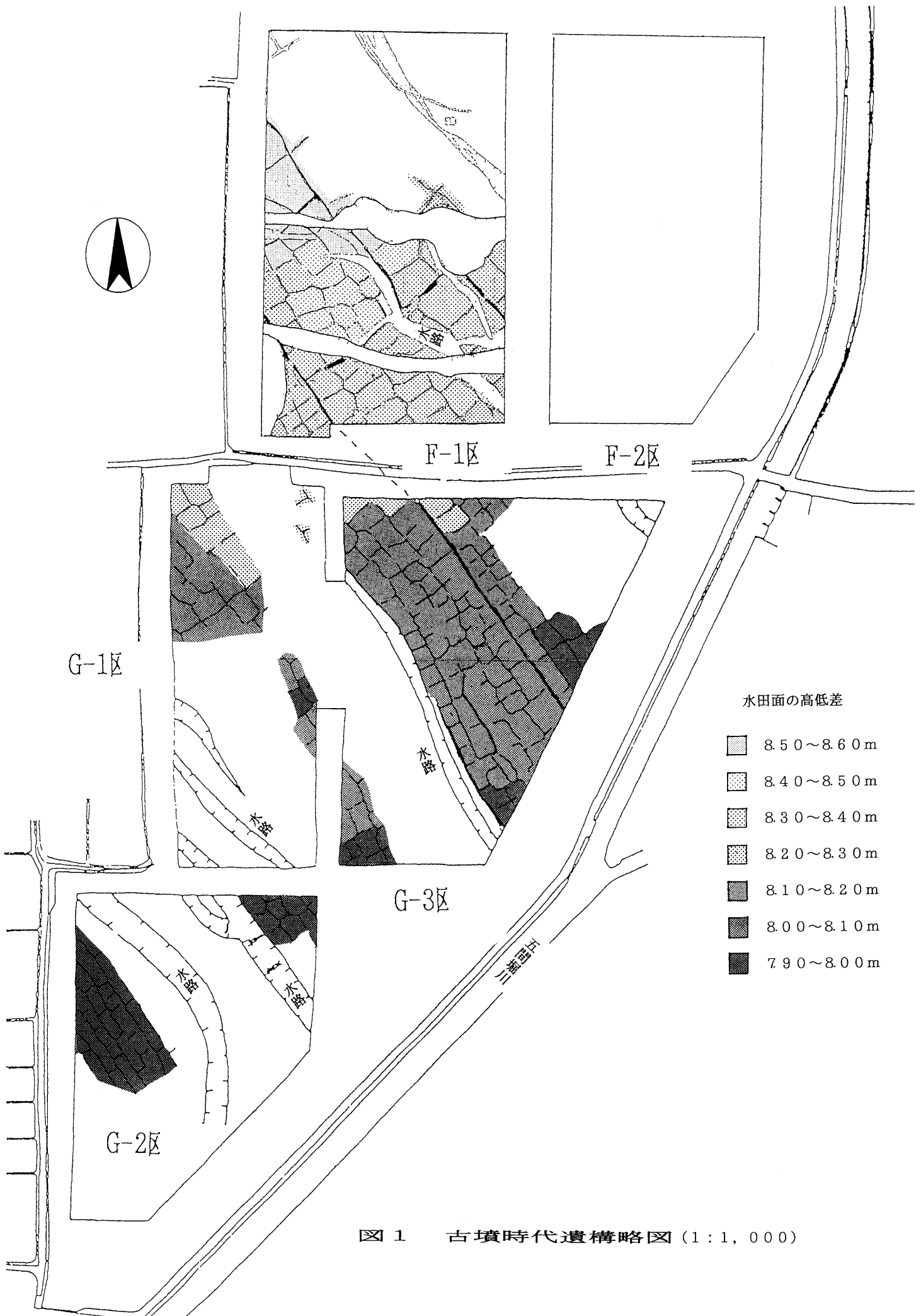


図1 古墳時代遺構略図(1:1,000)